

# 大学生の学業遅延傾向と性格特性の関係について

## The relationship between procrastination in academics and personality traits of university students

山本 凌平 菅 千索  
Ryohei YAMAMOTO Sensaku SUGA  
(教育学部第65期生) (心理学教室)

2018年10月2日受理

### 要約

本研究では大学生117名に対して、遅延傾向(課題を先延ばしにする傾向)を測定する「課題先延ばし行動傾向測定尺度」「学業遅延傾向尺度」「レポート課題着手日に関する質問」と、個人の性格特性を測定する「自己効力感尺度」「競争的達成動機尺度」「YG性格検査(下位尺度5つのみ)」を実施して、両者のあいだの相関について分析を行った。その結果、「自己効力感」が高い者は遅延傾向が低いこと、「一般的活動性」が高い者は学業遅延傾向は低いこと、「神経質」な者は遅延傾向が高いことなどが明らかになった。

### 問題と目的

好ましくない結果が予期されるにもかかわらず、決められた行動方針の開始や完成を自ら遅延させることを遅延傾向(procrastination)と呼ぶ(Ferrarri, Johnson & McCown, 1995; Steel, 2007)。古屋(2017)によれば、遅延傾向は日常生活の行動の中にもさまざまな形で観察され、幅広い行動について遅延傾向を示すことの多い人と少ない人がいることから、遅延傾向には個人の中の安定した性格特性が関わっていることが明らかにされているという。日常生活の中の遅延行動とは、たとえば、速く寝なければ次の日の朝に起きることが辛くなるということが分かっているにもかかわらず、夜更かししてしまうこと、返事をしなければならない電話やメールの送信を先延ばしにしてしまうことなどである。Tice & Baumeister(1997)では、こうした遅延行動は慢性化や長期化に伴って、本人に害を及ぼす不適応的で自己破壊的な行動となることが指摘されている。具体的には、遅延行動の対象となる課題等のパフォーマンスの低下にとどまらず、心身の不健康との関連も示唆されている(Solomon & Rothblum, 1984; Tice & Baumeister, 1997)。さらに藤田(2005)は、課題を先延ばしにする人は、ケアレス・ミスによるアクション・スリップを起こしたり、行動の無計画性により失敗を起こしたりしてしまうことを示している。

大学生の生活の中では、多くの授業や講義を受講していると、教員から提出日が決められた課題やレポートを課されることも多い。そういった課題は少しでも早く取り組み始めれば、楽で確実に提出できると分かっているはずなのに、取り組むまでに時間がかかってしまい、提出日の間近になって慌ててしまう、または、

終わらせることが困難になってしまうといった光景がよく見られる。

こういった学業遅延傾向に対してはこれまで多くの研究がなされている。Ellis & Knaus(1977)によれば多くの学生が学業遅延傾向に関わっており、またKim & Seo(2015)はメタ分析により、学業遅延傾向は学業上のパフォーマンスの量や質を低下させることを明らかにした。ただし、その関係の強さは学業遅延傾向の測定尺度によって異なっている。レイ一般遅延傾向尺度(Lay, 1986)、API(Aitken Procrastination Inventory; Aitken, 1982)およびTPS(The Tuckman Procrastination Scale; Tuckman, 1991)では負の相関が見られたが、PASS(The Procrastination Assessment Scale for Students; Solomon & Rothblum, 1984)では有意な相関は認められず、Choi & Moran(2009)の尺度では正の相関が認められている。これは測定尺度によって学業遅延傾向の定義が異なるためである。PASSは学業遅延傾向の測定に特化した尺度で、レポートや試験といった具体的な学業場面での行動について回答を求めるものである。また、Choi & Moranの尺度は遅延傾向の能動的側面と受動的側面を区別し、その適応的な側面に焦点を当てた点に特徴がある。他の尺度はすべて遅延傾向を一次元的な特性として捉えた尺度となっている。

亀田・古屋(1996)は、学業遅延傾向について「始動困難」「完成困難」「計画性」「焦燥感」「行動失敗」「勉強嫌悪」の6因子を抽出し、これらをもとにして学業遅延尺度を作成した。さらに古屋(2017)は、Steel(2007)の枠組みを用いることで、最終的に「遅延行動」「無計画実行性」の2因子による学業遅延尺度を再構

成した。

これまでの遅延傾向の研究から、遅延傾向は自己効力感や達成動機、完全主義などのさまざまな性格特性と関係があるとされている。そこで本研究では、藤田(2005)と古屋(2017)が作成した2つの遅延傾向尺度と、大学の講義にてレポート課題を課された場合を想定した独自の質問紙を用いることで、大学生の学業遅延傾向と性格特性との間にどのような関係があるかを検討するが、ここでは以下のような予想を設定した。

予想1：自己効力感とは目標達成に向けての計画や行動の見通しを立てる能力のことであるため、この能力が高い者は遅延傾向が低いと考えられる。

予想2：社会的・文化的に価値のあることを成し遂げたい欲求である競争的達成動機は、他者に評価されることを求めるため、その傾向が高い者は遅延傾向が低いと考えられる。

予想3：先行研究では失敗を恐れる傾向が高い者は学業遅延傾向が高いとされる。そのためYG性格検査で分類される性格特性である「神経質」が高い者は遅延傾向が高く、反対に「思考的外向」が高い者は遅延傾向が低いと考えられる。

予想4：YG性格特性の「一般的活動性」が高い者は、活発で仕事が速い特徴があるとされるため、学業遅延傾向は低いと考えられる。

## 方法

### 1. 被験者

調査対象は和歌山大学に在学する大学生で、質問紙による調査を行った。回収した質問紙のうち、回答が抜けているなど著しくデータの欠損が見られたものは分析から除外した。その結果、有効回答者数は117名、平均年齢は19.44歳(18歳～23歳)であった。

ここでは男女ともに学年の人数に偏りが見られたため、1年生をL群、2年生から4年生までをH群として分析を進めることにする。学年群別および男女群別の人数の内訳をTable 1に示す。

Table1 被験者の内訳

学年	性別		合計
	男性群	女性群	
L群	37	33	70
H群	27	20	47
合計	64	53	117

注：L群は1年、H群は2～4年。

### 2. 質問紙

#### (1)自己効力感尺度

本尺度は坂野・東條(1986)らが作成した16項目からなるものである。Bandura(1977)は、自己効力感とは、ある状況において目的を達成するために必要な行動を

自分が上手くできることと予想だと考えている。したがって自己効力感が高いということは、ある程度の成功可能性を見通す能力が高いことを意味する。採点方法は2段階評定(はい：1点、いいえ：0点)であり、得点が高い人ほど自己効力感が高いことを意味する。

#### (2)競争的達成動機尺度

本尺度は堀野(1987)が作成した達成動機尺度のうち、下位尺度である競争的達成動機尺度10項目を抜粋したものである。達成動機とは、ものごとを最後までやり遂げたい」「困難なことにも挑戦し、成功させたい」といった動機のことである。達成動機概念はAtkinson(1957)によって提唱され、行動の生起には達成動機と期待、価値の3つの要素が必要であるとした。採点方法は7段階評定(非常によくあてはまる：7点、ほとんどあてはまる：6点、少しあてはまる：5点、どちらともいえない：4点、あまりあてはまらない：3点、ほとんどあてはまらない：2点、全然あてはまらない：1点)であり、得点が高い人ほど競争的達成動機が高いことを意味する。

#### (3)YG性格検査

本尺度はGuilfordが作成したギルフォード性格検査をモデルに矢田部らが日本版として作成したYG性格検査の中から、神経質、協調性のないこと、一般的活動性、思考的外向、社会的外向の質問項目を各10問ずつ、計50問使用した。神経質とは、神経質、心配性、いらいらするなどの性質。協調性のないこととは、不満が多い、人を信用しないなどの不満性と不信性である。一般的活動性とは、仕事が速い、動作がきびきびしているなどの身体的な活動性と、ほがらかな性質である。思考的外向とは、深く物事を考える傾向がある、たびたび考え込む癖がある、などによって表される思索的傾向、瞑想的反省傾向の逆方向の性質。社会的外向とは、人との交際を好む、人と話すことが好きであるなどの、社会的接触を好む傾向である。採点方法は3段階評定(該当：2点、どちらでもない・わからない：1点、非該当：0点)であり、それぞれの性格特性ごとに採点し、得点が高い人ほど対応している性格特性が強いことを意味する。

#### (4)課題先延ばし行動傾向測定尺度

本尺度は、Aitken(1982)によって作成された23項目からなる課題先延ばし行動傾向測定尺度をもとに、藤田(2005)が翻訳して13項目にまとめたもののうち、課題先延ばし因子9項目を抜粋したものである。採点方法は5段階評定(あてはまる：5点、ややあてはまる：4点、どちらともいえない：3点、ややあてはまらない：2点、あてはまらない：1点)であり、得点が高い人ほど課題先延ばし傾向が強いことを意味する。

#### (5)学業遅延傾向尺度

本尺度は、亀田・古屋(1996)によって作成された遅延傾向尺度をもとにして、古屋(2017)によって再構成

された18項目からなるものであり、遅延行動因子9項目と無計画実行性9項目の2つの下位尺度からなる。遅延行動因子とは、決められた行動の開始や完成を自ら遅延させるといふ、遅延傾向の本質的要素に関わる内容を含んだものである。無計画実行性とは、計画を立てられない、あるいは計画通り実行できないという無計画性や自己制御の欠如を示すものである。採点方法は、5段階評定(非常によくあてはまる：5点、あてはまる：4点、どちらともいえない：3点、あてはまらない：2点、全くあてはまらない：1点)であり、得点が高い人ほど学業遅延傾向が強いことを意味する。

(6)レポート課題着手日に関する質問

「もしもあなたが14日後に提出しなければならないレポート課題を出された場合について、その課題を場合分けし、それぞれ組み合わせた場合について、あなたがその課題を課題提出日の何日前からやり始めるか、数直線上の数字から最もあてはまるもの1つに○をしてください。」として回答を求めた。課題の場合分けは、A：その課題の難易度が易しい場合と難しい場合、B：その課題の内容が好きなものである場合と嫌いなものである場合、C：その課題が占める成績評価の割合が80%である場合と20%である場合の3つとし、それぞれを組み合わせた計8パターンの質問を用意した。回答方法は、課題を出された日を提出日の14日前とし、提出日当日を0日前とした。したがって、例えば課題を出された日(提出日の14日前)からやり始めるなら14に○をする。また、課題提出日にやり始める、または課題をやらないのであるなら0に○をする。そのため○をつけた数字が小さい人ほど課題をやり始めるまでが遅いことを意味する。なお、ここでの分析においては、課題が「易しい・難しい・好き・嫌い・80%・20%」の6条件ごとに、該当する各4項目の平均を使用した。また「総合」はこれら6条件の平均をさらに平均したものである(Table 2参照)。

3. 手続き

調査時期は2017年11月である。1つの大教室において、集団式で授業中にアンケート調査形式で行った。最初に研究の趣旨の説明を行い、次いでプライバシーに関する説明を行った。その後、「フェイスシート」「自己効力感尺度」「競争的達成動機尺度」「YG性格検査」「課題先延ばし行動傾向測定尺度」「学業遅延傾向尺度」「レポート課題着手日に関する質問」の計7種類の質問紙を配布し、回答に関する注意事項、「レポート課題着手日に関する質問」の回答方法の説明をした後、回答させた。なお項目数の関係上、「YG性格検査」は3枚、「学業遅延傾向尺度」と「レポート課題着手日に関する質問」は2枚にわたって印刷した。回答について制限時間は設定していなかったが、実際に所要した時間は15分程度であった。また、質問紙はすべてA4用紙に片面印刷し、カウンターバランスをとるために

とじる順序を変え、2パターン作成した。「レポート課題着手日に関する質問」については、より正確な結果を得るために、質問項目の順番を変えて2パターン用意し、「フェイスシート」を除く質問紙の最初と最後にとじることで、1人あたり2度回答させた。そして分析ではこの2回の回答の平均を使用した。また「フェイスシート」で尋ねた内容は「学部」「学年」「性別」などである。なお、統計の分析にはIBM SPSSを使用した。

結果

1. 全体での平均と標準偏差および相関について

得られたデータ全体の平均と標準偏差をTable 2に示す。ここで課題着手日に関する質問項目に注目すると、成績評価に占める割合が80%であるときにはもっとも早く着手され(8.02日)、逆に、それが20%のときももっとも遅く着手される(6.09日)という結果が得られた。また、難しい課題は易しい課題よりも早く、また、好きな課題は嫌いな課題よりも早く着手されるという傾向にあった。

Table2 測定尺度の平均と標準偏差(n=117)

測定尺度		平均	標準偏差
自己効力感		6.02	3.90
競争的達成動機		47.91	9.55
YG 性格 検査	社会的外向	10.85	5.53
	思考的外向	7.37	4.48
	一般的活動性	9.88	4.21
	協調的でない	9.93	4.42
	神経質	12.79	5.14
課題先延ばし		28.40	8.78
遅延行動		32.39	6.44
無計画・実効性		28.11	7.45
課 題	易しい	6.27	3.57
	難しい	7.83	3.42
	好き	7.33	3.46
	嫌い	6.78	3.44
	80%	8.02	3.39
	20%	6.09	3.51
	総合	7.05	3.31

つぎにデータ全体についての遅延傾向と性格特性との相関係数をTable 3に示す。ここでは「課題先延ばし」「遅延行動」「無計画実行性」について、「自己効力感」とすべてにおいて弱い負の相関が認められた。「協調的でない」とは「課題先延ばし」「遅延行動」「無計画実行性」について弱い正の相関が認められた。「一般活動性」では「課題先延ばし」「無計画実行性」と弱い負の相関が認められ、「神経質」では「遅延行動」と「無計画実行性」と弱い正の相関が認められた。これらの



結果から、「自己効力感」が高い人は遅延傾向が弱い傾向にあると判断される。さらに「一般活動性」が高い人は課題先延ばし傾向と無計画実行性が弱い事が分かった。また、協調的でない人は遅延傾向が強い傾向があり、神経質な人は遅延行動と無計画実行性が強いことが分かった。

## 2. 男女別での相関について

男女別の遅延傾向と性格特性との相関係数を Table 4-1(男性群)およびTable 4-2(女性群)に示す。男性群では、「課題先延ばし」「遅延行動」「無計画実行性」について、「自己効力感」と「一般的活動性」とで弱い負の相関が認められた。「競争的達成動機」では「課題先延ばし」と「無計画実行性」に弱い相関が認められ、「協調的でない」では「遅延行動」と弱い正の相関、「課題着手日に関する質問(易しい、嫌い、80%、総合)」

に弱い負の相関が認められた。「神経質」では「遅延行動」と「無計画実行性」に弱い正の相関が認められた。

一方、女性群では「自己効力感」は男性群と同様の傾向が認められるが、それ以外の傾向は認められなかった。「競争的達成動機」と「遅延行動」との間に弱い負の相関が、「一般的活動性」と「課題着手日に関する質問(易しい、好き、20%、総合)との間に弱い正の相関が認められ、さらに「協調的でない」と「課題先延ばし」「遅延行動」「無計画実行性」との間に弱い正の相関が認められた。これらのことから、男性は社会的・文化的に価値があるとされることを成し遂げたいという意識が強い人や、身体的に仕事が速く動作がきびきびしている人ほど遅延傾向が弱く、課題に早く取り掛かる傾向があることが分かった。また、女性については不満性や不信性が強い人ほど課題を先延ばしにする

Table3 遅延傾向と性格特性の相関係数：全体(n=117)

性格特性	課題先延ばし	遅延行動	無計画実行性	課題							
				易しい	難しい	好き	嫌い	80%	20%	総合	
自己効力感	<u>-0.23</u>	<u>-0.29</u>	<u>-0.32</u>	0.03	-0.05	0.00	-0.01	-0.03	0.02	-0.01	
競争的達成動機	-0.08	<u>0.19</u>	-0.11	0.00	0.11	0.06	0.05	0.12	-0.01	0.06	
Y G 性格 検査	社会的外向	-0.11	-0.09	-0.15	0.08	0.08	0.10	0.06	0.09	0.08	0.09
	思考的外向	-0.03	-0.04	0.02	0.02	0.00	0.03	-0.01	0.03	-0.01	0.01
	一般的活動性	<u>-0.23</u>	-0.13	<u>-0.26</u>	0.14	0.11	0.14	0.11	0.09	0.16	0.13
	協調的でない	<u>0.21</u>	<u>0.36</u>	<u>0.21</u>	<u>-0.18</u>	-0.13	-0.13	<u>-0.18</u>	-0.16	-0.16	-0.16
	神経質	0.18	<u>0.32</u>	<u>0.22</u>	0.00	-0.01	0.03	-0.04	-0.02	0.01	0.00

注：下線は無相関検定で $p < 0.05$ .

Table4-1 遅延傾向と性格特性の相関係数：男性群(n=64)

性格特性	課題先延ばし	遅延行動	無計画実行性	課題							
				易しい	難しい	好き	嫌い	80%	20%	総合	
自己効力感	-0.21	<u>-0.29</u>	<u>-0.33</u>	0.04	0.00	0.01	0.03	0.00	0.04	0.02	
競争的達成動機	-0.20	0.13	<u>-0.25</u>	0.04	0.12	0.10	0.06	0.15	0.01	0.08	
Y G 性格 検査	社会的外向	-0.05	-0.12	-0.13	0.07	0.13	0.10	0.09	0.11	0.09	0.10
	思考的外向	0.01	0.02	0.03	0.05	0.07	0.09	0.03	0.09	0.04	0.06
	一般的活動性	-0.25	-0.21	<u>-0.34</u>	0.10	0.05	0.06	0.08	0.04	0.11	0.08
	協調的でない	0.11	0.33	0.14	-0.20	-0.19	-0.16	-0.24	-0.20	-0.19	-0.20
	神経質	0.18	<u>0.34</u>	<u>0.26</u>	-0.04	-0.09	-0.04	-0.10	-0.10	-0.03	-0.07

注：下線は無相関検定で $p < 0.05$ .

Table4-2 遅延傾向と性格特性の相関係数：女性群(n=53)

性格特性	課題先延ばし	遅延行動	無計画実行性	課題							
				易しい	難しい	好き	嫌い	80%	20%	総合	
自己効力感	-0.23	-0.27	<u>-0.28</u>	-0.01	-0.14	-0.04	-0.11	-0.11	-0.04	-0.08	
競争的達成動機	0.13	0.33	0.16	-0.08	0.07	-0.02	0.02	0.07	-0.08	-0.0	
Y G 性格 検査	社会的外向	-0.20	-0.06	-0.18	0.12	0.01	0.11	0.02	0.06	0.08	0.07
	思考的外向	-0.11	-0.15	0.00	0.00	-0.08	-0.04	-0.05	-0.02	-0.07	-0.05
	一般的活動性	-0.18	0.03	-0.12	0.20	0.19	0.25	0.15	0.18	0.23	0.21
	協調的でない	<u>0.29</u>	<u>0.37</u>	<u>0.28</u>	-0.14	-0.03	-0.09	-0.09	-0.08	-0.10	-0.10
	神経質	0.15	0.25	0.15	0.08	0.12	0.15	0.06	0.10	0.11	0.11

注：下線は無相関検定で $p < 0.05$ .

傾向があることが分かった。

### 3. 学年群別の相関について

ここでは学年群(L群：1年とH群：2～4年)ごとに分析を行っているため、学年群別の遅延傾向と性格特性との相関係数をTable 5-1(L群)およびTable 5-2(H群)に示す。まずL群では、「課題先延ばし」「遅延行動」「無計画実行性」について、「自己効力感」と弱い負の相関が認められた。「競争的達成動機」では、「遅延行動」と弱い正の相関が認められ、「一般的活動性」では、「課題先延ばし」と弱い負の相関が認められた。さらに、「協調的でない」では「課題先延ばし」「遅延行動」「無計画実行性」について、弱い正の相関が認められ、「課題着手日に関する質問(易しい、嫌い、80%、総合)」と弱い正の相関が認められた。「神経質」では、「課題先延ばし」「遅延行動」「無計画実行性」について、弱い正の相関が認められた。

それに対してH群では「自己効力感」においてはL群と同様の傾向が認められたが、その他では同様の傾向は認められなかった。「社会的外向」では、「課題先延ばし」「無計画実行性」と弱い負の相関が認められ、「課題着手日に関する質問(難しい、好き、嫌い、80%、20%、総合)」と弱い正の相関が認められた。「一般的活動性」については、「課題先延ばし」「遅延行動」「無計画実行性」と弱い負の相関が認められた。これらの結果から、L群では不信性や不満性を持っていたり神経質な人ほど遅延傾向が強いが、H群では身体的に活発であったり、人と関わることを好む外向的な人ほど遅

延傾向が低く、実際に課題に取り掛かるのも早いことが分かった。

### 考察

本研究の目的は、大学生の学業遅延傾向と性格特性との間にどのような関係があるかを検討することであった。そこでまず「課題先延ばし」「行動遅延」「無計画実行性」と「自己効力感」との関係についてであるが、被験者全体で「課題先延ばし」「行動遅延」「無計画実行性」と弱い負の相関が認められ、自己効力感が高い者は遅延傾向が低いという予想1は支持された。

つぎに「競争的達成動機」との関係については、被験者全体ではどれも相関が認められなかったため、予想2は支持されなかった。しかし、男女別、学年群別で見ると、女子とL群では競争的達成動機の高い者が遅延行動を起こしやすい傾向が認められ、男子では競争的達成動機の高い者は課題先延ばし傾向と無計画実行性が低く、H群では課題先延ばし傾向が低い傾向が認められた。

「課題先延ばし」「行動遅延」「無計画実行性」と「YG性格検査」との関係については下位尺度ごとに考察する。「社会的外向」と「思考的外向」では、どれも相関が認められなかったため、予想3の一部は支持されなかった。「一般活動性」では、被験者全体で「課題先延ばし」と「無計画実行性」と弱い負の相関が認められたため、予想4は支持された。一方、「協調的でない」では被験者全体で「課題先延ばし」「行動遅延」「無計

Table5-1 遅延傾向と性格特性の相関係数：L群(n=70)

性格特性	課題先延ばし	遅延行動	無計画実行性	課題							
				易しい	難しい	好き	嫌い	80%	20%	総合	
自己効力感	-0.22	-0.20	<u>-0.27</u>	0.03	-0.14	-0.05	-0.06	-0.08	-0.02	-0.05	
競争的達成動機	0.05	<u>0.26</u>	-0.07	-0.05	0.05	0.02	-0.02	0.09	-0.09	0.00	
YG性格検査	社会的外向	-0.02	-0.04	-0.07	0.00	-0.05	0.01	-0.07	-0.01	-0.04	-0.03
	思考的外向	-0.05	-0.08	0.13	0.04	-0.08	0.02	-0.05	-0.02	-0.01	-0.02
	一般的活動性	-0.22	0.06	-0.16	0.13	0.06	0.14	0.06	0.08	0.11	0.10
	協調的でない	<u>0.32</u>	<u>0.40</u>	<u>0.28</u>	-0.22	-0.18	-0.15	<u>-0.25</u>	-0.21	-0.20	-0.21
	神経質	<u>0.28</u>	<u>0.41</u>	<u>0.23</u>	-0.10	-0.06	-0.03	-0.13	-0.07	-0.09	-0.08

注：下線は無相関検定で $p < 0.05$ 。

Table5-2 遅延傾向と性格特性の相関係数：H群(n=47)

性格特性	課題先延ばし	遅延行動	無計画実行性	課題							
				易しい	難しい	好き	嫌い	80%	20%	総合	
自己効力感	-0.24	<u>-0.42</u>	<u>-0.39</u>	0.05	0.08	0.07	0.06	0.05	0.08	0.06	
競争的達成動機	-0.23	0.06	-0.15	0.05	0.14	0.07	0.12	0.13	0.06	0.10	
YG性格検査	社会的外向	-0.21	-0.18	-0.24	0.19	0.24	0.22	0.23	0.22	0.22	0.23
	思考的外向	0.01	-0.01	-0.15	-0.05	0.06	-0.01	0.01	0.04	-0.04	0.00
	一般的活動性	-0.25	<u>-0.36</u>	<u>-0.39</u>	0.17	0.19	0.17	0.20	0.15	0.22	0.19
	協調的でない	0.04	0.27	0.11	-0.13	-0.07	-0.11	-0.09	-0.09	-0.11	-0.10
	神経質	0.03	0.18	0.22	0.15	0.08	0.15	0.09	0.07	0.16	0.12

注：下線は無相関検定で $p < 0.05$ 。

画実行性」と弱い負の相関が認められ、「神経質」では被験者全体で「行動遅延」「無計画実行性」と弱い負の相関が認められた。したがって「神経質」が高い者は遅延傾向が高いという予想3の一部は支持された。「協調的でない」が高い者は他者に対して不満や不信感が強い傾向があるため、他者から課される勉強や課題に対して嫌悪感を抱いてしまい、なかなか課題に取り組むことができないのではないだろうか。「神経質」が高い者は、細かいミスが気になったり失敗を恐れたりすることで、計画通りに進めることができなかつたり、行動するまでに時間がかかってしまうのではないだろうかと考えられる。

最後に「課題着手日に関する質問」と各尺度との考察である。「課題着手日に関する質問」はレポート課題の提出という、より具体的な学業場面での行動について回答を求めるものであるため、学業遅延行動の能動的側面を測定できたと考えられる。課題の各条件と取り掛かる日との関係を見てみると、最も早く取り掛かる傾向がある条件は、成績評価の80%を占める場合であった。一方、最も遅く取り掛かる傾向がある条件は、成績評価の20%を占める場合であった。この結果から、課題に取り掛かる時期にはその課題が占める成績評価の割合が最も影響することが明らかになった。課題の各条件と各尺度との相関は、被験者全体では認められなかったが、男女別と学年群別では相関が認められるものがあった。男女別に考察すると、男子では「協調的でない」が高い者が、レポート課題を先延ばしにする傾向があり、特に、易しい、嫌い、80%の課題を先延ばしすることが認められた。一方、女子では「一般的活動性」が高い者はレポート課題に取り掛かるのが早い傾向が見られた。中でも、易しい、好き、20%の課題は先延ばしされにくいことが分かった。

本研究の結果から、2つの遅延傾向尺度と課題着手日に関する質問では、有意な相関関係が認められる尺度に違いが生じる結果となった。この違いの原因は、単に質問の設定に問題があったのか、それとも遅延傾向尺度で測定される遅延傾向と、より現実的な状況での遅延傾向には差が生じるという、学業遅延傾向のより詳しい傾向とみなせるのかは定かではないため、更なる研究が必要な部分であることは間違いないだろう。また、男女や学年の被験者の数を揃えることができなかったことが、結果に影響している可能性を否定できない。そして、学業遅延傾向は学業のパフォーマンス低下の原因になりかねないため、本来避けなければならないものであり、どういった場面で遅延傾向が起りやすいのかについて更なる研究を行うことで、遅延傾向を抑えることにつながる可能性が考えられる。今回は「自己効力感」「競争的達成動機」「YG性格検査(「社会的外向」「思考的外向」「一般的活動性」「協調的でない」「神経質)」との関係と「課題着手日に関する

質問」という、より具体的な学業場面での遅延傾向を探ったが、遅延傾向は複雑なメカニズムに基づいており、様々な要素との関係性を明らかにする必要があるだろう。そのためには、学業場面に限らず、日常生活での様々な場を対象にした研究を続けていくことが求められる。これらのことを今後の研究の課題とした。

#### 引用文献

- Aitken, M. E. 1982. A personality profile of the college student procrastinator. University Microfilms International.
- Atkinson, J. W. 1957. Motivational determinants of risktaking behavior. *Psychological Review*, **64**, 359-372.
- Bandura, A. 1977. Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Choi, J. N., & Moran, S. V. 2009. Why not procrastinate? Development and validation of a new active procrastination scale. *The Journal of Social Psychology*, **149**, 195-211.
- Ellis, A., & Knaus, W. J. 1977. *Overcoming procrastination*. New York: Signet.
- Ferrari, J. R., Johnson, J. L., & McCown, W. G. 1995. *Procrastination and task avoidance: Theory, research, and treatment*. New York: Plenum Press.
- 藤田 正 2005. 先延ばし行動と失敗行動の関連について、奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **14**, 43-46.
- 古屋 健 2017. 大学生の学業遅延傾向に関わる性格特性について。立正大学心理学研究所紀要, **15**, 33-45.
- 堀野 緑 1987. 達成動機の構成因子の分析—達成動機概念の再検討。教育心理学研究, **35**, 148-154.
- 亀田有美・古屋 健 1996. 学業場面における大学生の遅延傾向に関する基礎研究。群馬大学教育学部紀要, **45**, 353-364.
- Kim, K. R., & Seo, E. H. 2015. The relationship between procrastination and academic performance: A meta-analysis. *Personality and Individual Differences*, **80**, 26-33.
- Lay, C. H. 1986. At last my research article on procrastination. *Journal of Research in Personality*, **20**, 475-495.
- 坂野雄二・東條光彦 1986. 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み。行動療法研究, **12**, 73-82.
- Solomon, L. J., & Rothblum, E. D. 1984. Academic procrastination: Frequency and cognitive behavioral correlates. *Journal of Counseling Psychology*, **31**, 503-509.
- Steel, P. 2007. The nature of procrastination: A meta-analytic and theoretical review of quintessential self-regulatory failure. *Psychological Science*, **8**, 454-458.
- Tice, D., & Baumeister, R. F. 1997. Longitudinal study of procrastination, performance, stress, and health: The cost and benefits of dawdling. *Psychological Science*, **8**, 454-458.
- Tuckman, B. W. 1991. The development and concurrent validity of the Procrastination Scale. *Educational and*

*Psychological Measurement*, **51**, 473-480.

**参考文献**

林 潤一郎 2007. General Procrastination Scale 日本語版の作成の試み—先延ばしを測定するために. 日本パーソナリテ

ィ心理学会, **15**, 246-248.

Lay, C. H., Edwards, J. M., Parker, J. D., & Endler, N. S. 1989. An assessment of appraisal, anxiety, coping, and procrastination during an examination period. *European Journal of Personality*, **3**, 195-208.

